

神のわざが現れるため

ヨハネの福音書 9:1~7



9:1 またイエスは道の途中で、生まれつきの盲人を見られた。

9:2 弟子たちは彼についてイエスに質問して言った。「先生。彼が盲目に生まれついたのは、だれが罪を犯したからですか。この人ですか。その両親ですか。」

9:3 イエスは答えられた。「この人が罪を犯したのでもなく、両親でもありません。神のわざがこの人に現われるためです。」

9:4 わたしたちは、わたしを遣わした方のわざを、昼の間に行なわなければなりません。だれも働くことのできない夜が来ます。

9:5 わたしが世にいる間、わたしは世の光です。」

9:6 イエスは、こう言ってから、地面につばきをして、そのつばきで泥を作られた。そしてその泥を盲人の目に塗って言われた。

9:7 「行って、シロアム（訳して言えば、遣わされた者）の池で洗いなさい。」そこで、彼は行って、洗った。すると、見えるようになって、帰って行った。

しきたり

イエスが泥を作って彼の目をあけられたのは、安息日であった。（ヨハネ9:14）

彼らの律法の解釈では、泥をつくることは禁じられている働くこととされていました。イエスが彼に行なった神のわざは、彼らの伝統と真っ向から対立していたのです。

安息日は人間のために

安息日は人間のために設けられたのです。人間が安息日のために造られたわけではありません。

（マルコ2:27）

神の律法は私たちに自由といのちを与えますが、人のしきたりは私たちに縛り、いのちを失わせます。したがって、神のみわざは、しばしば人の伝統をこわすような形で現われます。

神のわざが私たちのうちで始まる時、この世のものを捨てる必要が出て来ます。私たちが慣れ親しんできた習慣や、文化や、社会など、私たちが捨てなければいけないことがあるのです。そのときに、私たちの霊的な目が開かれて、神のいのちにあずかることができます。

口伝律法

パリサイ人たちによるモーセの律法の解釈を、「口伝律法」と呼びます。

1. これは後代に、「ミシュナ律法」として文書化されますが、イエスの時代にはまだ「言い伝え」の段階にありました。
2. 新約聖書で「先祖たちの言い伝え」とあればこの口伝律法を指しています。
3. パリサイ人たちの間では、口伝律法が聖書（モーセの律法）以上の権威を持っていました。

タルムード

ユダヤ教の經典であるタルムードは、前5世紀から1200年かけて議論してきた律法解釈の集大成です。現代ユダヤ教は、タルムードを聖典として信仰の土台に据えています。

1. ミシュナ（口伝律法）がその中心にあり、ゲマラと中世以降のラビの注解がそれにつけ加えられています。
2. タルムードには2種類あります。エルサレム・タルムード（5世紀）と、バビロニア・タルムード（6世紀）がそれです。後者はアラム語とヘブル語で書かれており、分量的には前者の3倍もあります。普通タルムードと言えば、後者を指します。

律法主義との戦い

イエスは、「しかし、忌まわしい者だ。偽善の律法学者、パリサイ人たち。あなたがたは、人々から天の御国をさえぎっているのです。自分もはらず、入ろうとしている人々をもはらせないのです。」(マタイ23:13)

彼らのことばは、人々を天の御国に導くことを約束しながら、実は地獄に陥れるような偽りの福音だったのです。今のことばを使うと異端がそれに当てはまるでしょう。彼らは、羊の皮をかぶった狼であり、見えるところは敬虔であっても、その実を否定する者です。

目の見えぬ手引きども。あなたがたは、ぶよはこして除くが、らくだのみこんでいます。」(マタイ23:24)

このことばは、英語では、「大事を見過ごして、小事にこだわる。」ということわざにもなっています。同じく動物の血を食べてはならないという律法から、彼らはぶどう酒を飲むとき、ぶよをこして除きました。ぶよが動物の血を吸っているかもしれないからです。しかし、当時その地域で一番大きい動物であつたらくだを飲み込んでいる、つまり大量の血を食べています。

再臨の預言

ああ、エルサレム、エルサレム。預言者たちを殺し、自分に遣わされた人たちを石で打つ者。・・・見なさい。あなたがたの家は荒れ果てたままに残される。あなたがたに告げます。

『祝福あれ。主の御名によって来られる方に。』とあなたがたが言うときまで、あなたがたは今後決してわたしを見ることはありません。」

(マタイ23:37~39)

キリストが再び来られる直前に、律法学者、パリサイ人が大患難の中から叫ぶ言葉になります。そのとき、彼らはイエスを初めてキリストとして認めるのです。

弟子たちの質問

弟子たちは彼についてイエスに質問して言った。「先生。彼が盲目に生まれついたのは、だれが罪を犯したからですか。この人ですか。その両親ですか。」(ヨハネ9:2)

私たち人間は、何か不幸に思われること、悲しむべきことが起こると、それはどうして起こったのかとその原因を追求します。そして、その原因を発見すると、それを非難し、咎め、責めるのです。

イエスの答え

イエスは答えられた。「この人が罪を犯したのでもなく、両親でもありません。神のわざがこの人に現われるためです。」(ヨハネ9:3)

だれかのせいではなく、ただ神のみわざがこの人に現われるためだ、とイエスは言われています。イエスは、過去に私たちが何を行なったかは、とくに関心がありません。イエスが最も考えておられるのは、人々が今の状態から回復して、神のいのちにあずかることです。これが福音であり、恵みです。

私たちは、過去という暗やみの鎖につながれた存在ではないのです。神によって解放されて、新しいいのちにあずかることができます。過去に何を行なったかは問題にされず、全く新しくされます。「だれでもキリストにある者は、新しく造られた者です。古いものは過ぎ去りました。見よ。すべてが新しくなりました。」(2コリント5:17)とパウロが言いました。

神のわざを行うために

すると彼らはイエスに言った。「私たちは、神のわざを行なうために、何をすべきでしょうか。」イエスは答えて言われた。「あなたがたが、神が遣わした者を信じることで、それが神のわざです。」(ヨハネ6:28~29)